HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 討論を中心とする授業の展開 ： その方法と実際 |
| Author(s) | 小笠原, 正明; 細川, 敏幸 |
| Citation | 高等教育ジャーナル, 2, 228-234 |
| Issue Date | 1997 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.2.228 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/29861 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 2_P228-234.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 討論を中心とする授業の展開
## －その方法と実際－

小笠原　正明，細川　敏幸

北海道大学高等教育機能開発総合センター

# Development of Debating Class
## —Method and Experience—

Masaaki Ogasawara, Toshiyuki Hosokawa

Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University

*Abstract* — The general level of Japanese debating, for instance at conferences, is unacceptably low. We intended to encourage the freshmen in one of the classes of Hokkaido University to raise their standards in speaking and debating. We trained inexperienced speakers in how to prepare a talk and how to give an impromptu speech to listeners in the class. Then, a series of debates on the issues and practices in Japanese higher education was organized and selected members participated in a symposium held on the 120th anniversary of the university. The progress of the students after half a year of training was satisfactory.

## 1. はじめに

討論は大学の教育・研究活動において重要な役割を果たしている。研究室のゼミ，卒論や修論の発表会，講演会，研究会などでは必ず討論の時間が設けられており，プレゼンテーションのあとで活発な議論が期待されている。それぞれの分野や大学の水準は，討論の内容によって推定できることが多い。討論が重要なのは大学の中だけではない。会議や集会などあらゆる民主的な手続きの中に組み込まれている。また，創造性を必要とする企画会議や，国益がからむ国際交渉などでも決定的な重要性をもっている。

しかし日本人は伝統的に討論を苦手としており，とくに国際的な舞台でその弱さを指摘されることが多い。英語力の弱さにその原因を求める傾向があるが，必ずしも英語だけの問題ではないように思う。最近さらに気かかりなのは，若い世代の討論の力が目に見えて低下していることである。大学の授業で質問が出なくなってからすでに久しいが，最近では専門のゼミにおいてさえ発言が少なく，教官がいなければ討論がなりたたなくなるところが多いという。

討論は多分に生活習慣の問題なので，従来大学レベルでその技術が問題とされることはなかった。とくに 1950 年代から 70 年代にかけて初等・中等教育を受けた世代（現在の大学教官の主力）は，教室の内外でかつて頻繁に行われていた議会形式の討論を経験し，活発な生徒会や課外活動で議論をする機会が多かったから，大学の専門分野における討論の慣習に容易になじむことができた。しかし，同様のことを現在の初等・中等教育に期待することは難しい。とくに入試対策に特殊化した現在の中学や高校の教育においては，生徒

のそれぞれが自分の考えを人々の前で明快率直に述べたり，相手に反論したりする訓練は無きに等しい。もっぱら一方的な知識伝授型の授業を受けてきた学生に対して，大学の授業で活発な討論を期待することには始めから無理がある。これまでの大学教育では，それをしかたがないものと考え，専門課程に進んでマンツーマンの教育が可能になった段階で，初歩から討論の訓練を行っていた。しかし人間の発達過程を考えると，大学後期の段階ではすでに手遅れで，多くの学生がその習慣を身につけずに社会人となっている。また，大学の研究室単位で行われる専門分化した討論の訓練だけでは他に応用できないという欠点もある。

この報告では，専門に進む前の大学の初年級でどのようにしたら一般的な討論の訓練ができるかを，実際の例を取り上げて解説する。問題とする討論の種類はなるべく基礎的かつ常識的であるものにとどめ，あらゆる分野おいて応用できるものにした。

## 2. 討論のカテゴリー

討論には，お茶の時間の雑談から国際会議や議会での議論にいたるまでさまざまなカテゴリーとレベルが存在する。大学において特に重要視されるのは比較的狭い専門分野における学術的な討論であるが，この報告はそのような種類の討論を対象としていない。細分化した学問分野における討論には，専門に固有の討論の枠組み（フレームワーク）が前提としてある。さらに比較的せまくて明快な意味をもつ一定数のジャーゴン（専門用語）が定められており，ある手続きに従って議論すれば自然に結論が得られるようになっている。このような種類の討論は，討論一般の力量を高めるためというよりは「専門家としての思考方法」の訓練を目的としている。そのためには教育効果が高いが，準備なしにこのような討論のみを経験すると，独善的な専門主義に陥る危険がある。その前に一般的な討論の力量を身につけさせることが望ましい。

しかし，一般にフレームワークの存在しない討論というものはありえない。(注1) いくつかの前提を設けなければ正しいか間違っているかという判断ができないからである。大学初年級（あるいはそれ以前）の討論教育では，「健全な市民の論理」というものを考えて，それを討論の枠組みに設定することが望ましい。「健全な市民の論理」そのものが議論の対象で漠然としているという見方もあろうが，現在の日本社会や国際社会を成り立たせている基本的な考え方が（明示されてはないが）存在する。討論を指導する教官は，このような討論の前提をいつも意識している必要がある。

討論一般の力量を高めるためには，次の節で説明するような「ディベート」の形式をとることが有効である。「ディベート」にもいくつか種類があって，特に日本では大学の ESS (English Speaking Society) を中心に発達した「競技ディベート」が良く知られている。しかし，アメリカ流に発展進化した「競技ディベート」は，データ主義と技術主義に陥って，かなり以前から日本の学生の間で基盤を失っている。大学の初年級で実践するためには，日常の経験にもとづいてふつうの言葉で筋道立てて議論するイギリス風の伝統的な「ディベート」の方が望ましい。(注2)

要するに，ここで問題としている討論は，お茶の時間の雑談ほど散漫ではないが，かといって ESS の「競技ディベート」ほどルール化されてはいないものである。できればルールを意識しないで討論することが望ましいが，討論文化が背景にないこともあって，はじめのうちは多少ルールについての教育が必要であろう。しかしルールは，議論が拡散したり混乱したりすることを防ぐために必要な最少限の項目にとどめておくことが望ましい。

## 3. 実践

### 3.1　準備

1996年度の北海道大学の全学教育の一環として行われた総合講義「大学の未来」は，本センター専任教官7名が担当し，日本および欧米の大学の歴史と現状を紹介し，あわせて生涯学習や大学開放に関する最近の話題もとりあげた。また，ディスカッションを重視し評価することをあらかじめガイダンスで述べた。毎回の講義の後に30分程度討論の時間を設け，講師が学生の質問に答えるとともに，学生の意見を引き出し，場合によっては学生同士の議論も誘導した。これにより，議論に積極的に加わり臆することなく発言できる雰囲気を作り出すことができた。

次に，宿題として特定テーマについて1000字程度の作文を課し，授業時間に学生に対してプレゼンテーションの訓練を行った。作文において特に注意して指導した点は，パラグラフの作り方である。1つのパラグラフには1つの意味のみが対応すること，パラグラフの主題を代表するセンテンス（トピックセンテンス）をまず考えること，主題からはずれるセンテンスをパラグラフに入れないことなどを指導した。(注3) また，明快で印象的なプレゼンテーションを行うために，出だしをどのようにするか，結論をどのように述べるかなどについて指導した。この際に配布した資料を付録1(注4)に示してある。このような作文とプレゼンテーションの訓練は，定められた時間内に簡潔にかつ印象的に自分の考えを述べるために，ディベート授業に先だって済ませておく必要がある。

### 3.2　ディベートの実際

ディベートの論題は，講義に関連して，「成熟した情報社会で大学は生き残れるか？」および「科学の進歩は人間を不幸にするか？」とした。前者の論題によるディベートは，「大学の歴史と現状」の講義を終えた学期の中間に行った。後者のディベートはすべての講義終了後，2回に分けて勝ち抜き戦で行った。

1回目のディベートに際しては，次のような一般的なディベートのルールを強調した。

① 討論においては礼儀を尊重する。
② 2つのチームはクジ引きにより論題に対し賛成か反対かを決める。
③ 1つの試合には賛成と反対のチームのほか，議長1名，時間係1名が必要である。
③ 試合の進行中は議長の指示に従わなければならない。
④ 試合開始後においては，両チームとも議長に対してルール，その他について質問することはできない。
⑤ 試合の各過程で発言するときは時間を厳守すること。
⑥ 発言あるいは質問を行う前には必ず挙手して，議長の指示に従う。指名されない限り発言することはできない。
⑦ 発言，質問，回答は必ず椅子から立ち上がって行う。
⑧ 時間の測定は発言あるいは質問のため席から立ち上がったときから始める。
⑨ 表やグラフを使用してもよい。また，相手の使用したものを使ってもよい。
⑩ 相手がルールに違反したと思われるときは議長にアピールできる。議長がそれを認めたときは減点の対象となる。

論題は2週間前に提示し，反対・賛成どちらの主張もできるよう議論を整理することを宿題とした。ディベート当日は講義室前部にハの字型に机を配置し，両サイドに分かれた議論を他の学生の前で行った。各学生の前には大型（A4の1/3程度）の名札が置かれ，お互いによく分かるようにした。司会者は中央に位置し，ストップウォッチで計時しながらベルを用い，表1の時間表に従い議論を進行させた。反論の際には持ち時間が限定されているので，チェス時計を利用して双方の残り持ち時間を表示した。はじめは，ディベート自体に馴れる必要があるので，グループは名簿の順に4班に分け（1グループはサポーターを含め4～5名），2グループづつ，2回のディベートを行った。司会と評価は教官が担当した。

**表 1　ディベートの時間表（一例）**

**＜持ち時間(3 対 3 の場合)＞**

| | | |
|---|---|---|
| **1. 賛成論の提起** | | **5 分** |
| **2. 反対側の質問** | | **3 分** |
| **3. 反対論の提起** | | **5 分** |
| **4. 賛成側の質問** | | **3 分** |
| **5. 休憩** | | **5 分** |
| **6. 反論** | **(1)反対側** | **各チームの持ち時間 10 分** |
| | **(2)賛成側** | **同上** |
| **7. 反対側の最終弁論** | | **3 分** |
| **8. 賛成側の最柊弁論** | | **5 分** |

**(注) 時間はベルで知らせ,議長が宣言する。1 鈴は 30 秒前，3 鈴はその時間であることを意味する。**

最初の「賛成論」および「反対論」の提起に際しては,① 賛成側は問題を提起しなければならない，② 講論の主要な論点は賛成論または反対論の中で述べられていなければならない, という 2 つのルールを示した。①は「問題提起の義務」と呼ばれるもので，ふつう，「世間の常識」や「一般に正しいと考えられていること」に対する異議申し立てという形をとる。②は最初に議論すべき問題のすべてを提示して, 議論の範囲を定めるという役割を持つ。

なお，技術的な問題として，質問，反論，最終弁論にはそれぞれ以下のような制限がつけられるのが普通である。

＜質問＞

① 各チームの持ち時間は 3 分であるが，一方のチームの質問に対する相手チームの回答の時間も加えられる。

② 質問する側は相手チームの回答の範囲を制限しても良い（途中で打ち切らせても良い）が，イエスまたはノーだけを求める質問をしてはいけない。

③ 回答希望者が複数いるときは議長がそのうちの 1 人を指名する。

④ 質問する者は相手チームに対して誰が答えるかを指名することはできない。

⑤ 質問は必ず 1 人 1 回はしなくてはならない。

＜反論＞

① 反論は反対側から行い, 次に賛成, 反対の順で進める。

② 最後の反論を行ったものは最終弁論をすることはできない。

③ 反論においては相手に対する質問が含まれていてよいが, 相手チームはそれに直接答える義務はなく，別の形で反論してもよい。

④ 持ち時間を全部消化しなくても 3 回目の反論を終わったときはそこで反論を終了する。

＜最終弁論＞

① 最終弁論は反対側から始まり，賛成側で終わる。

② 最終弁論を行うものは各チームから 1 名のみである。

2 回目のディベートは，最優秀チームを決めるために勝ち抜き戦とした。また 1 回目の経験から，90 分の講義時間の中で表 1 の規則通り実施すると時間が足りなくなるため一部時間を変更した。ディベートのいろいろな側面を経験させるために，学生に司会・計時を担当させた。また，教官とは別に学生の評価も求め総合して優勝チームを決定した。評価には付録 2 のような採点用紙を用い，最高 10 点の配点でそれぞれのチームを評価した。チームの構成はくじ引きにより決定した。

### 3. 3　授業の効果

授業の初期において, 講義の後に議論をする時間を設けたため, 終了時間が遅くなることがあった。この点について学生は不満をもらしていたが, 講義終了後のアンケート調査によれば，学生が短縮を期待しているのは講義の時間であり, 討論に費やす時間が長いとは感じていなかったよう

である。次週の講義のための資料を前もって渡すこともあったが, このことによって講義時間が短縮されることはなかったようである。

1 回目のディベートは，学生が不慣れなこともあり，準備不足をうかがわせる発表が目に付いた。しかし，2 回目にはこの点は大きく改善されており, 教官が感心するような議論を展開するグループも現れた。討論に関しては積極的に参加する学生が多かったが, これを苦手とする学生も中には存在し，対応に苦慮した。しかし，全体としてディベートを中心とした講義は好感を持って迎えられたようである。

ほとんどの学生は, 決められた時間内に発表するという経験がないため, 時間配分が不得手である。特に，自分で管理すべき時間を司会者が親切に教示する（例えば 30 秒前の予鈴）ことを期待し，持ち時間をオーバーすることがあった。このような欠点を意識して矯正したため, ディベートは数分の時間内に自己の主張をまとめて発表する良い訓練となった。ルールについては，参加者も司会者もよく理解しておく必要がある。例えば，「最後の反論を行ったものは最終弁論をすることはできない」「質問はかならず 1 人 1 回はしなくてはならない」というルールは忘れがちである。

優秀と思われる学生を互選させ, 10 月に企画した創基 120 周年記念シンポジウム「今の大学，これからの大学」中の学生同志のディベートへ参加させた。「インターネット時代に大学は生き残れるか」という論題で行われたディベートでは，白熱した議論が行われた。

## 4. おわりに

大学初年級の学生に討論を覚えさせることには一種の感動がある。最初の時間に目の前に並んでいる学生の顔は無表情で, 多くの教師にとっては（良くも悪くも）ある偏差値で輪切りにされたマスにしか見えないであろう。しかし，その同じ学生たちが訓練を受けて, 次第に議論という自己表現の技術を身につけはじめると, 一人一人がいきいきと違って見えてくる。ある人は元気よく攻撃的に議論すると思えば, ある人は氷のように冷静に核心をついた議論をする。ある人は全身を使って躍動的に表現しようとする。そして激しい議論のあとで一種の連帯感が生まれる。

現代の学生は意見を持たず, ものごとを深く考えないと言われているが, その多くは誤解の産物である。学生たちは（当然にも）それぞれ個性的で, 良く考え, 人々の役に立ちたいと考えている。そのように見えないのは, これまで自分の意見を率直に述べ，相手の意見に耳を傾け，それに賛成あるいは反対の意見表明をするという習慣がないからである。これは学生の責任ではなくて，教育する側の責任である。大学入学以前の学生たちは, きわめて片寄った世界で長いあいだ生活してきている。極言すれば，それはマークシートの桝目を塗りつぶすことによってしか自己主張できない特殊な世界である。そのような現実はいずれ改善されなければならないが, 今すぐどうすることもできないとすれば, 大学における初年級の教育をまず改善しなければならない。大学で初めて経験させる授業は, すべて意識的に学生に自己解放の機会を与えるものでならなければならない。この報告で紹介したような教育法は, そのために役に立つと思う。

## 注

1. 科学分野における討論のフレームワークについては，小笠原 (1991) ,「討論のすすめ」,『パリティー』，1991 年 4 月号，丸善出版，に解説がある。

2．イギリス風ディベートについては，ピーター・ミルワード (1983)，『ディベートのすすめ』，英友社，にくわしい。

3. 英文のパラグラフの作り方の解説書としては，Chaplen, T. (1970), *Paragraph Writing*. London: Oxford Press が優れている。

4. この資料は，Peter Kenny (1982), *Public Speaking for Scientists &Engineers.* Bristol: Adam Hilger　を参考にして作った。

## 付録1　スピーチ入門

**聴衆は王様**

◇その場にいる人のなかで，自分の話を一生懸命聞こうとしている人は，じつはほんの1握りしかいないのだ，という冷たい事実を知ること。

◇一生懸命聞こうとしている人でも，思わず知らずほかのところに注意が行ってしまうという人間の生理を知ること。(あるクラスの生徒のうち何人が講師の話に注目しているかを調べた結果によると，注目度は講義開始後5分後でピークに達しほぼ100％となるが，その後急速に低下して20分後には25％以下となる。講義が続く間そのままで経過し，講義終了の5分前に突然60％近くまで回復する)。

**話す前に書け（手間ひまかけよ，ということ）**

◇話そうと思っていることはまず原稿に書いてみること。

◇文章に書くまでは，頭のなかで考えていることはかなりあやしい。場合によっては正しくなかったり論理的でなかったりする。書き言葉にすると考えが整理され，より正確になる傾向がある。

◇ただし，いつも話すときのような自然な文体で書くようにしよう。会話ではめったに使わないような長くてややこしいセンテンスを書くことは意味がない。

◇じっさいのスピーチのときには，原稿から離れて自然な調子で話すようにしよう。原稿をまる読みすると説得力が薄れる。

**スピーチの順序**

(1) 出だし

◇「出だし（オープニング）」は非常に重要である。あまり型にはまった堅苦しい調子ではいけないし，かといって，あまりくだけすぎてもいけない。「出だし」の役目は聴衆の注意を引くことにある。うまく聴衆の注意を引くことが出来たら，少なくともそれを維持するチャンスがある（あとは実力しだい。聴衆の注意を引けなかったら，そのチャンスもないということ。）

◇「出だし」ではスピーチのテーマを短いメッセージにまとめて伝え，それによってまず聴衆にインパクトを与える。

(2) 本論

◇ここでは聴衆の関心をつなぐよう努力する。

◇レポートなどの書きものでは同じことを繰り返すことは許されないが，スピーチではある程度許される。場合によっては繰り返しが必要でさえある。一定時間ごとに繰り返すことによって，聴衆の注意を喚起することができる。

◇しかし，繰り返すたびに何か新しいことや別のことを付け加える必要がある。単なる繰り返しは時間の浪費。

◇聴衆の注意をそらすような言葉を発してはいけない。たとえば,「これはあまり重要ではありませんが…」とか「つまらぬことですが…」と言えば，聞くことにあきた聴衆は人間の心理としてすぐ別のことを考えるようになる。

◇つなぎの言葉に気をつけよう。「次に…」などという言葉を繰り返すと，話が羅列的，平面的になって単調になる。論理的な関係，因果関係を示すような言葉でそれぞれのセンテンスをつなぐようにすると，話が立体的になってわかりやすくなる。

(3) エンディング

◇話が終わりに近づいたら，これから終わるというシグナルを送った方がよい。「終わりにあたって」,「最後に」,「以上をまとめると」などといえば，聴衆はもう一度注意を払うものである。（前述の「聴衆の生理」を想起）

◇といっても，このような言葉を乱発してなかなか終わらないと，聴衆はだまされたと思って，だんだん講師に対して敵意をもつようになる。

◇エンディングでは，聴衆に記憶しておいてもらいたいメッセージを選んで，印象的に話す。出だしとエンディングを結びつけるのも効果的である。こうすると,「中抜き」で聞いていた人も，なんとなくまとまりのある話を聞いたような気がするものである。

**以上をまとめると**

◇出だしでは注意を喚起する―**これから話そうとすることを話せ**。

◇本論では内容を納得してもらうように話す―**話したいことを話せ**。

◇エンディングでは確認させよ―**話したことを話せ**。

## 付録 2　ディベートの採点表（一例）

| 〈賛成側〉 | 〈反対側〉 |
|---|---|
| 1. 賛成論の提起 (2)<br>主張は論理的かつ明確<br>でまとまっているか？ | 2. 反対側の質問<br>質問は的確か？ |
| 4. 賛成側の質問<br>質問は的確か？ | 3. 反対論の提起 (2)<br>主張は論理的かつ明確<br>でまとまっているか？ |
| 5. 反論は的確か？ (2) | 5. 反論は的確か？ (2) |
| 7. 最終弁論<br>自説の擁護は適切か？ (2)<br>相手側への反駁は適切か？ (2) | 6. 最終弁論<br>自説の擁護は適切か ？(2)<br>相手側への反駁は適切か？ (2) |
| 8. 総合評価 (2) | 8. 総合評価 (2) |

文頭の番号は順序を示す。（）内は満点。合計は 10 点。